

1、歴史マニアの感じた「死」

— 過去からの呼びかけ —

今、日本は「養和」の時代ならぬ「令和」の時代を迎え、「原爆」や「大空襲」による「大量死」の記憶も遠く去って、いつにない平和な時代を迎えております。

あなたの周りには、飢えに足を引きずり物乞いする人もいなければ、我が子におっぱいを与えながら死んでいる痩せさらばえた母親の姿もありません。理不尽に切腹を命じる暴君もいなければ、空から降り注ぐ焼夷弾の脅威もありません。不景気だと愚痴はこぼしても、周りにあるのは、いつにない繁栄におぼれ平和ぼけている社会が広がっているばかりです。

にもかかわらず、私たちの中には、「死」に対する不安が渦巻いています。そして、その不安を忘れようと、日々の営みに埋没し、仕事に励み、趣味にのめり込み、社会的な運動に走りと、コマネズミのようにあくせく生きている人がほとんどです。

私事で恐縮ですが、自分自身は幼い頃、具体的には就学前のことですが、「死ぬということ」をイヤというほど考えました。もちろん哲学的なことであるはずもなく、「死んだらどうなるんだろう」「死ぬときは苦しいんだろうか」等々、取りとめもないことを考え続け、あげくは「まだ先のことだ」と考えることを放棄し、「今は何か楽しいことを考えよう」という結論に達するのです。

それも夜になり眠る段になると、「眠ってしまっって、このまま死んでしまったら」「目が覚めなかつたら……」と、死に対する不安が復活し、眠らないよう頑張っているのですが、いつしか寝込んでしまっう。それがお定まりのコースでした。

ところが、年を経るごとに「死」は遠いものになっていき、まるで自分は死なないかのような錯覚に陥っていきまっした。「死」という世界を自分の中から押し出したつもりで、意気揚々と生きてきたつもりでおりまっしたが、その「不安」や「恐怖」は、無くなつたわけではなく、しっかりと自分の中に根付いており、割れ目を見つけては噴き出すチャンスを狙っているという状態だつたのです。

それがついに、覆い隠しきれず噴き出したのが、二十代前半、浅間山でのロケ地の事件でした。

当時、私は映画が好きで、自分の中の不安が顔を覗かせるたびに、映画の世界に浸ることで、その不安を忘れようとしていました。それが昂じて映像の世界に入り、コマーションフィルムやPR映画を制作するプロダクションの制作進行として働くようになっておりました。そんな映画青年としての最後の仕事となったのが、「七人の侍」——なんて書いたら格好いいんですけど、そんなわけはありません。何だと思えます？

ロケ地は群馬県の嬭恋村^{つまこいむら}。江戸時代、天明の浅間山大噴火で火砕流に呑み込まれたところ。こう書いていくと、「やっぱり本格的時代劇か」、なんて思われそうですが、実は農耕用トラクターのCMフィルムでした。

ロケハンで、土地の古老に話を聞くことがあったのですが、「農耕用トラクターのCM撮影です」と言っているのに、そんな話はそっちのけで、お爺さん、語り伝えられてきた被災の模様をこと細かに話してくれるのです。これって別にコマーション撮影とは関係ないことで、「そんなんじゃないんです！」と断つても、古老の話は止ま

りません。

こちらでも歴史マニアを自任する人間ですから、話に耳を傾けるだけでなく、ついつい質問までしたり、場合によっては現地に来て行ってもらったりと、現地での資料集めに奔走し、プロデューサーやディレクターとの約束の時間に遅れたりすることもしばしば……。

「そんな話、撮影と何の関係もないやろっ！」

と、ついには「鬼」の異名を持つプロデューサーの怒りに火を付けることとなります。では、このように、とつちめられながらもこだわり・続けた我が取材記録に、迷惑だとは思いますが、読者諸氏におかれましても、しばし目を通していただきたいのです。

七月四日 浅間山付近の土地、はげしく震動する。村人はあまり戸障子がガタガタ揺れるので、避難を真剣に考えるようになる。震動は激しくなる一方で、頑丈な家も傾き、建具もまがり、家屋はいつ屋根が崩れてくるかわからない状態となり、恐怖に襲われた村人は、広い野原や森林へ避難しはじめる。なかには、大地の裂



浅間山噴火の写生画

けることを予想し、竹林を切り払って仮の住居を作り、幼児を背負い、老人をかばいながら、家財道具を運び出すなど、上を下への大騒ぎとなる。事態の普通でないことに気付き、家族を上州や武州に避難させる人もいた。

七月五日〓夜九時頃から、昼夜をとわず大地が震動し、小さな家は倒壊した。このため負傷者が続出し、村人は老若男女の区別なく、二、三里も駆け足で逃げなければならなかった。しかし浅間山から二、三十里四方は皆同じ状態だったという。村人たちは何とか命だけは助かりたいと、泣き叫ぶ声が村々に響いた。

七月六日〓朝、河川の堤防が決壊し、付近の民家は、倒壊したまま濁流に押し流された。やがて、小さな砂岩が多量に降りはじめた。浅間山を見ると、山は黒雲と黒煙で覆われ、昼なお暗く、山上からは、青や赤色の炎が二筋、三筋と吹き出していた。そうこうする内、何かわからないが、浅間山の方向にドウドウという大きな音がして、黒い雲が頭上に覆いかぶさり、山や谷や森林を包み込んで、あたりは真っ暗闇となった。続いて浅間山頂から熱湯が怒涛のように押し寄せ、村人たちは「今度は、水でなく湯が流れてきた」と半死半生のありさまで、小高いと

ころへ逃れる者もあり、木の上へはい登ってようやく命拾いをする人もいた。また逃げ足の遅い人は、熱湯で足を火傷し、四つばいになって逃げた。また、老人や子供は、この熱湯で多数火傷して死んだという。

そのうえ、大石や大木が噴火の炎に焼け、大木は根元からスッポリと抜けたまま、二つ、三つに折れて空中より落下した。この火に全身を焼けこがして逃げる人もいた。あたり一面真っ暗になったけれども、大石や大木の焼けて落下するときは、まるで真昼のような明るさとなった。村人たちは、この火を避けるため、鍋や釜



七月八日 久しぶりに晴れる。浅間は相変わらず火を吹いているが、誰もがほっと息ついた。鎌原村^{かんばらむら}では、朝から村人たちが、畑に飛んできたままになっている石を片付けたり、早い昼寝を楽しんだりしていたが、午前十時ごろ、

七月七日 前日までの百倍も大きいかと思える山鳴りと、千倍も激しく伝わってくる地揺れの中で、ついに火口から溶岩がほとぼしり出た。火災流は六里ヶ原を焼き山頂から八キロほどのところで止まった。この日、伊勢崎あたりでは、真っ暗な日中、稲妻が走り、雷鳴が絶えない。

を頭にかぶって逃げたが、着物の襟や懐に火が入り、暑くて我慢できず、着物を脱ぎ捨てて裸で逃げ回ったという。

とっさの騒動のため、各家とも、牛や馬を引き出す暇がなく、打ち捨てたり、追いつたりしていたが、これら多数の牛馬が、焼け石に打たれて、死にもの狂いになって駆け回る。ただでさえ東西南北も分からず逃げ回っている中へ、牛馬が乱入し、当たるを幸い薙ぎ倒し、角でぶつかりしたため、ここにもまた多数の死者を生じることとなった。

また野獣たちも多数逃げ出し、火と煙に包まれ、怒り狂い、人を蹴倒し、あるいは食いつき、このためまた死人が続出した。

やがて、一丈四方もあろうかと思われる大岩が、一面に火の塊となって落下してきた。これに触れた人は、あつと言う間もなく死亡した。

こうした危険なありさまに村人たちは上を下への混雑となり、あるいは踏み潰され、あるいは突き転ばされて死ぬ者も多く出た。真っ暗闇の中を無我夢中で三、四里も走り、沓掛^{くつかひ}(中軽井沢)まで逃げ、やっとのことで命拾いをした人もいる。



遺骨から複眼された鎌原村での被災者母子

た家屋、一千戸を下らず、死者は最も少ない記録で千二百二十四、多い場合で千六百二十四にのぼる（鎌原火災流の際）。

浅間山は、これだけの火石を吐いたあとも、この日の内にさらに新しい溶岩を押し出す。前よりも粘性が高く、流れにくい性質のもので、鎌原火災流の西端と重なり合う形でやはり北麓へと流れ、火口から六キロのところまで止まった。鬼押出おにおしだしと呼ばれる、溶岩流出はこれを最後に止まった。噴煙、鳴動もこの日をピークに鎮静化に向かいはじめたが、なお浅

ひとときわ激烈な鳴動が地底から突き上げてきた。鎌原火災流の発生。火口壁をほとぼしり出た火災流は十分ほどで鎌原村に達し、村の九十三件の家はすべて火災流の下に埋められた。五百九十七人の村人のうち、たまたま用があつて村にいなかった者と、一部の幸運な人々（火災流の中央でなく縁側にいた人々が、丘の上の観音堂へ逃げた）を除いて、四百六十六人が瞬時に死んだ。二百頭いた馬も、百七十頭が失われた。

火災流の流入により吾妻川が氾濫。逆水によって上流に洪水をもたらす。家や死体などが利根川へと押し流されていく。鎌原村を襲い、吾妻川に流入した火災流の総量は、一億立方メートル、二億トンにのぼると見積もられている。流失し



鎌原村で発掘された被災者母子